

プロローグ

——私たちは大切な「物語」を生きている

本書では、これまで私が支援のなかで出会ってきたさまざまな人の「語り」を紹介しながら、彼らの行動の奥にある思いや支援における大切な視点について考えていきたい。それら「語り」の一つひとつは、語り手が、人生という流れのなかで出会った出来事を、語り手自身の言葉によって紡いだ大切な物語である。

本書に登場してくれる人々は、彼らが語る経験の意味を聴かなければ、“病気だから”“障がいだから”あるいは“何かの困難を抱えている人だから”などといった外側からの解釈で理解されることが多かっただろう。そして、たとえば、彼らが語ったとしても、その語りは矛盾を含んでいたり、あっちへこっちへと揺れ動いていたり、聴き手にとっては、理解しがたい「わか

らなさ」を含んでいる場合がある。そのため、ときに聴き手から切り捨てられ、彼らの声が私たちに届かないこともあったかもしれない。しかし、むしろ、こうした矛盾や葛藤を抱えたまま語られる言葉のなかにこそ、その人のリアリティが姿を現していると私は思っている。

ある精神障がい男性が、窃盗で警察に捕まったときに語ってくれた物語である。その男性をとりまく多くの人は、窃盗を犯すなんて「障がいのせい」、あるいはもともと倫理観や罪の意識のかけらもない人だったんだと解釈した。しかし、拘留後に私に語ってくれた物語は少し違っていた。その男性は「母子分離」が課題となっていた。母子ともに離れがたく、長い間うまくいっていなかった。それが、この窃盗事件によって、母親と彼は別の精神障がい者のグループホーム（GH）に入居することが決まったのだ。

「捕まったのはつらかったです。でも、僕が警察に捕まることで、母親と離れることができた。このまま、30歳にもなつて、母さん、母さん言うたらあかんからね。共依存から逃れるためには、誰かが離してくれんとどうにもならんというのはわかっていたんです」

彼の口から「共依存」という言葉が出てきたことに驚いた。これは、たぶん、今までの支援のなかで職員から繰り返し言われた言葉だったのだろう。そのため、彼なりに「共依存」から逃れるためには、逮捕というかたちであつたとしても、誰かから引き離してもらふ他はないと

考えたのかもしれないと思った。支援者たちからすれば「何を勝手なことを言ってるんだ」ということになるだろうが、私には、この母子間の膠着した状態からどうにか逃れ、よりよい母子関係を再構築するためのひとつの試みであったとも感じられた。

人の「語り」には多様な意味がある。なぜ私は悲しかったのか。どうして私はあんなことをしてしまったのか。自分自身でもはつきりとはわからないその感情や行為に、理由や意味を与え、私の「物語」を作り上げる。それが「語り」なのである。だからこそ、同じ出来事を経験したとしても、そこには、まったく異なる意味をもつ「語り」が現れるのだ。

たとえば、ある人にとっては「窃盗の物語」であっても、別の人にとっては「親子関係を再構築させようとする物語」となる。ある人にとっては「挫折」は、別の視点からみれば「自分を成長させる契機」として語られるかもしれない。私たちはときに、彼らが経験している出来事を唯一の真実のように捉えてしまうが、実際にはそこには多様な意味が潜んでいることがあるのだ。

本書は、さまざまな病気や障がい、困難な状況に置かれた人々の語りを通して、そこに眠っている「多様な意味」に光を当てたいと思っている。ここで紹介される語りは、必ずしも客観的事実とは限らず、理解しがたいものもあるだろう。語り手たちも、ときに自分の経験をうまく説明できず、沈黙し、戸惑い、あるいは別の言葉を探し続けたこともあった。聴き手である私も、そんな語り手の様子に、聴くことをあきらめようと思ったこともあったが、語り手のそ

の揺らぎの過程こそが重要であり、そこにこそ人々が生きると言う「リアリティ」が立ち現れてきたと感じた。

とりわけ、社会のなかで「語りにくさ」を抱えた人々の声は、しばしば周縁へと追いやられてきた。そして、語ったとしても、理解されないこともあるだろうし、誤解されることもある。その結果、多くの語りが「存在しないもの」として扱われてきたかもしれない。でも、たとえば、社会から顧みられない「小さな声」だとしても、わかりにくい「語り」だとしても、その光は消えることはない。そして、いつか現れる聴き手を待っているのだ。

本書は、そのような「小さな声」に耳を澄ませるための場でありたいと考えている。ここに収められた一人ひとりの物語は、決して普遍的な真実を表すものではないし、ひとつの解釈で納得されるものでもない。むしろ、みなさんが彼らの語りに触れ、ともに新たな物語を拓いていくってくださったら嬉しい。

「語り」に触れるということは、他者の生きている世界に触れると同時に、自分自身を揺さぶる経験にもなるかもしれない。他者の語りに出会うことで、これまで「当たり前」と思っていた自分の視点に気づくこともある。「みえていくけど気づかないこと」がそこに現れ、新たな物語への入り口になるのだ。

みなさんが本書を通して、もしかしたらまだ出会っていない語りにここを拓くための一助となれば幸いである。

当事者の「語り」から支援を紡ぐ＊目次

プロローグ——私たちは大切な「物語」を生きている 1

第1章 攻撃性の背景にある「つながり」への思い…………… 10

「生きづらさ」はどこにある 11／怒ってばかりのひととさん 13／「おとぎ話解釈法」を用いて 16

ひととさんの解釈 18／本当はつながりたい 21／おわりに 23

第2章 「不自由さ」は障がいがある人だけのもの？…………… 25

そもそも「障がい者観」って何？ 27／「あなたは一緒に笑えますか？」 30／私たちの「不自由さ」 33

おわりに 36

第3章 福祉現場で職員が自己を語るとき…………… 38

福祉は援助対象者との距離が近い？ 39／ゆりさんの援助を拒んだ母親から学んだこと 41

「壁に向かって話しているわけではない」 42／意識的に自分を語る 43／「私」が自分を語るとき 46

絶妙な「タイミング」をつかむ 47／おわりに 50

第4章 しんどさから抜け出すために——他者との間にある「かたち」に気づく……………52

同性愛に苦しむしゅんさん 53／自分軸と他人軸 56／しゅんさんのカミングアウト 57

「生きていたくない」「消えてしまいたい」と訴えるゆみさん 60／おわりに 65

第5章 障がいがある人と援助者、それぞれの「傷つき」を聴く……………67

支援において援助者に生じる「負の感情」 69／報われない思いが被害感情へ 70

モンスターという言葉の背景にある援助者の「傷つき」 74／どうすれば楽になるのか 77

おわりに 79

第6章 他者の力を信じるということ……………82

ある職員さんの話 84／他者から「力」を奪うということ 86／「ちょっと違うかなと思う」 88

おわりに 93

第7章 「問題」が手放されるとき……………96

そもそも「問題」とは何か 98／なつきさんの「問題」とは何だったのだろう 101／おわりに 107

第8章 面談での対話を日常の体験に落とし込む……………109

孫に教えられたこと 112 / 「実寸大」の恐怖にするために 115 / おわりに 121

第9章 語らないこと、語れないこと……………123

刺青を背負う 125 / 人が信用でなくなったわけ 131 / おわりに 134

第10章 我慢の「リミッター」はどこに……………136

自分に「赤札」をつけて生きる 137 / 自分の責任で他者の世界を「壊してはいけない」 140

「我慢」は結局、自分のため？ 143 / おわりに 148

第11章 「カサンドラ症候群」という物語……………151

エア・ナイフで刺される日々 153 / 「君に対して興味もないし、知りたいとも思わない」 155

「医者じゃないんだからわからないよ」 157 / なぜ自分の気持ちを伝えられないのか 159

本当はいい人というのがわかってから 160 / 怖いという感情 162 / おわりに 165

第12章 それぞれの“Narrative Reality”…… 167

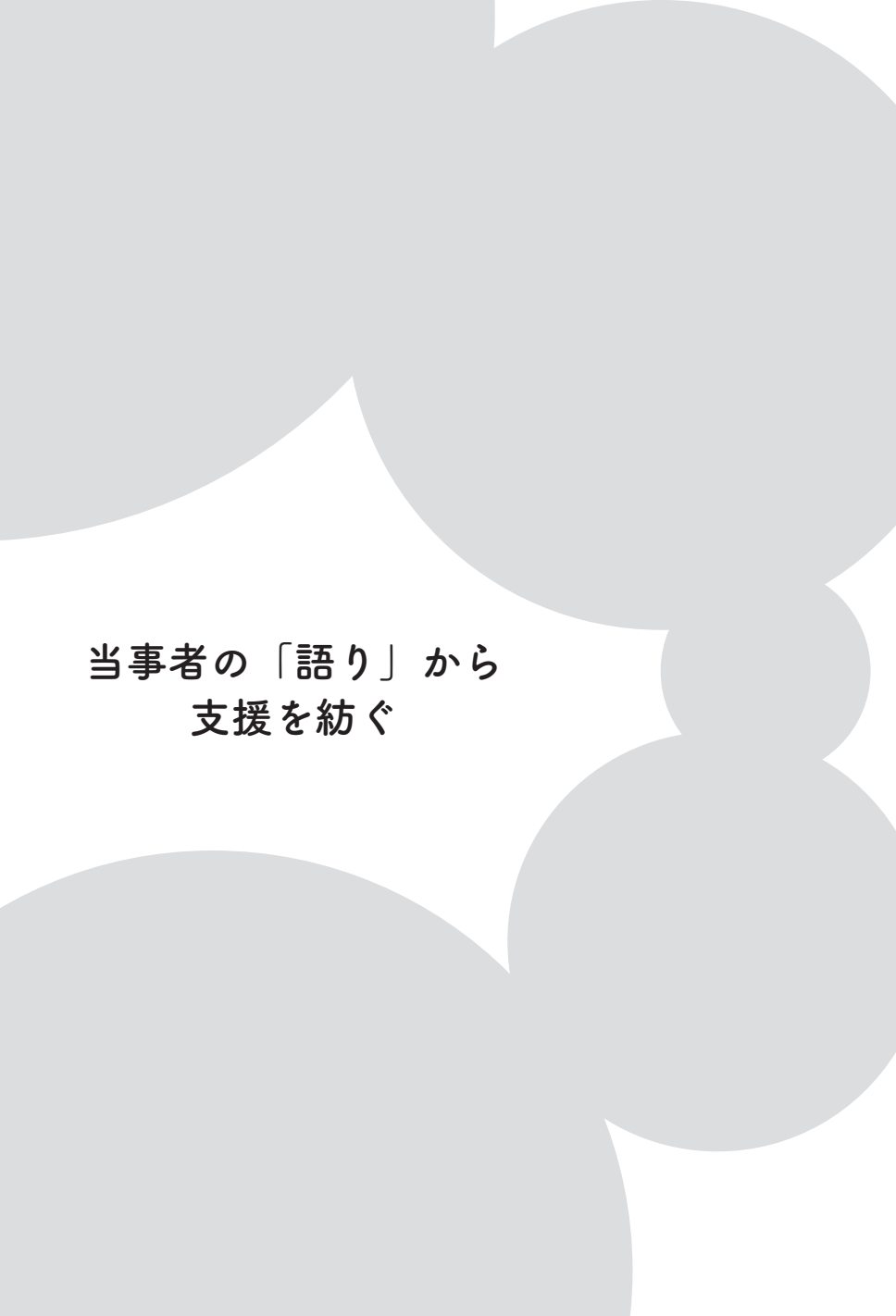
記憶を書き換える 169／大きな物語が動くとき 172／おわりに 177

第13章 「大切な人」を失うということ…… 181

「母親が捨てた世のなかを生きる」 183／「自殺って悪なのか」 187／おわりに 189

エピローグ——「新たな物語」のはじまり 192

あとがき 196



当事者の「語り」から 支援を紡ぐ

第1章

攻撃性の背景にある

「つながり」への思い

私は二十数年にわたり、知的機能や発達に障がいがある人の支援に携わってきた。また、性別に違和を覚えていたり、大好きな親から虐待を受けていたり、重篤な疾患を抱えている子どもなど「生きづらさ」を抱える人の援助にも取り組んできた。そして、彼らの語りからは「みえているのだけれど」「気づかなかったこと」をたくさん教えてもらった。

私は「ナラティヴ」という概念を基盤として調査や面談を行っている。ナラティヴを簡単にいうと、他者の固有の物語を聴き、聴き手とともにそこで語られた経験に意味を与えていくものである。つまり、語り手が語る物語は聴き手との関係のなかで新たな物語を創造していくものといえる。そのため、ここで「聴き手」である私の物語にも少し触れておきたい。

私は現在、大学の教員をしながら、大阪市西成区を中心としたコミュニティ支援のなかで心理的援助を担当している。コミュニティ支援では、福祉施設や病院で援助を必要とする人をま

んなかにおいて、多職種で彼らの生活を支えている。本書ではそこで出会った人々の語りを通して、私たちが「気づかなかったこと」がみえてきたとき、語り手や聴き手だけではなく、語り手を取り巻く周囲の環境がどのように変化していったのかを紹介したいと考えている。

本章では、知的障がいがある人への援助のなかで、援助を必要としていた人はどのような現実を生きていたのか、そして、私たちは「何に気づかなかったのか」を記述していきたい。私たちにみえていることがすべてではない。みえているけど気づかなかった世界を聴き、そこから立ち上がるものがあるとき、そこに双方にとって新たな世界が拓かれるのだ。

「生きづらさ」はどこにある

かつて、発達障がいと診断された人が私のインタビューに協力してくれたことがある。彼が援助者として発達障がいがある施設利用者にかかわっていたとき、私にこう語った。

「ケース検討票をみたことがありますか？ まず、よいところが書いていない。問題行動のみが記載されています。（中略）紙切れで人はわからん。数字で人はわからんと僕は思っています。（中略）悪い情報ばかりで。実際に会って、他愛のない話をしながら、その人の支援を組み立てるのが本当じゃないかと思っています^①」

私はいろいろな施設でケース会議に参加させていただくことがあるが、たしかに彼が言うことには頷ける。ケース検討票を前に、「ああじゃないだろうか」「こうじゃないだろうか」と支援にかかわっている職員たちの意見を聴きながら、「実際はどうなんだろう」と悩みなながらもその人にとって最善と思われる支援を職員と一緒に組み立てていく。最近では、当事者である本人を交えてのケース会議が開かれることも増えてきた。

ところが、当事者に話を聴くと「なんか尋問されているようで怖いから参加したくない」と言う人もいる。私や職員にそんなつもりはまったくなくても、そこにどうしても無意識的な力関係を感ぜてしまうかもしれない。

それでも、自分が知らないところで、自分の行動の背景を想像され、解釈され、あたかもそれが真実のように語られるとしたら、私だったらしんどい。その場にいれば「そうじゃない」と言い訳もできるし、適応的ではないとしてもSOSを発信しようとしている行動であったなら「これに困っているから助けてほしい」と言うこともできる。それにもし、当事者不在のケース会議であれこれ話し合っている職員たちの「想像」や「解釈」が的外れだった場合、その人が求める支援にはつながらないだろうし、当事者を傷つけることになってしまうこともある。本当は、障がいがある人と周囲の人たちとの日常的なかわり合いのなかで、その人が求める支援に気づいていくことができればいいのだが、残念ながら、一人の職員が多くの利用者を支援しなければならぬ福祉施設の構造上、当事者もそれが難しいことは知っている。職員も

利用者一人ひとりに丁寧にかかわりたいと思っても、やらなくてはならない仕事如山積みで、そうすることができない現実がある。

こうした施設にある構造上の限界のなかで、本当は聴かなくてはいけないことが聴けず、利用者一人ひとりの大切な物語が零れ落ちていくこともあるのだ。そして、その零れ落ちた物語が、当事者の行動上の問題に姿を変えることがある。

「生きづらさ」は、個人の特性のみで生じるものではない。個人の特性を内部に抱えながら、人的・物的環境とかかわっていくなかでいかようにもかたちを変えていくものなのだ。そうであるならば、その環境のなかの一人である私たちが、彼らの「生きづらさ」に気づくにはどうすればよいのだろうか。

怒ってばかりのひとしさん

ここでは、ひとしさん（50代男性、仮名）の話をしたい。ひとしさんとは、N市にある就労継続支援事業所で出会い、2年間にわたって面談をさせてもらったのち、1年前に面談を終了した。ひとしさんは軽度遅れのある自閉症と診断され療育手帳を取得している。

ここで書かせてもらうにあたって、ひとしさんと当時のことを振り返ったのだが、ひとしさんは当時の話をする「すまんかったなあ」と笑いながら頭を下げる。私は「いやいや、こち

「そこそごめんなさいね」とひとしさんにつられて思わず笑う。今でこそ、こうして笑い合えるようになったが、当時のひとしさんは常に怒っているし、ひとしさんを支える職員も、攻撃性を向けるひとしさんにいつ殴られるかとびくびくしていた。職員はひとしさんの強い言葉に感情を大きく揺さぶられ、どう援助したらよいかに苦慮していた。しかし、心理的援助を担当する私はといえば、月に数回しか会わない「外の人」という印象が強かったようで、常に一緒に過ごす職員に比べれば、距離を感じていたのか、大きな声を出すこともなく穏やかに付き合ってもらっていた。

ところが、面談が始まって1年くらいが経った頃だろうか、私はひとしさんから大きな声で怒鳴られるということがあった。私は長い間、障がいがある人や援助を必要とする人の面談を続けているが、面談相手から怒鳴られた経験は後にも先にもこれが初めてだった。

どうして怒鳴られたかといえば、こういうことだった。その当時、私の身内に重篤な病気を抱えている人がいて、ひとしさんと約束していた面談の日に長時間におよぶ手術をすることになった。そして、「すみませんが、こういう事情なので、面談の日を変更させてもらえませんか」とお願いしたときのことだった。

「あんたは、心理やろ。身内の手術とかそんなこと関係ないわ。これが、あんたの仕事やろ。日は変えん。自分でなんとかしろ」と怒鳴られたのだ。これは正直、身内の病気も心配だったし、それまで面談の枠を崩したことは一度もないし、私なりにひとしさんに一生懸命がかかわっ

てきたと思っていたので、ひとしさんから怒鳴られて「なんて薄情なんだろう」と悲しかった。その話を聞いていた職員さんたちは「こんだから誰もひとしさんとかかわろうとしない。ひとしさんも誰にもかかわろうとしない。そういう人なんです。だから気にしなくても大丈夫ですよ」と慰めてくれたのだが、職員さんの慰めをありがたく思いながらも、何かしつくりいかない複雑な思いを抱えていた。どんな理由があるとしても面談の枠組みを崩したのは私なのだから怒鳴られても当然なのだ。

ひとしさんは面談のなかでは、「誰それに腹が立つ」とか「誰も信用できない」「一人が気楽でいい」と語り、実際に事業所でも他の人と行動をともしたり会話をしたりすることもなく、いつも一人だった。ひとしさんがいうには、若い頃に生まれ故郷の東北を後にして、関東や関西の地方都市を転々とし、仲間という仲間にも恵まれず過ごしてきた。いろいろ騙され、馬鹿にされ、金銭的に追い詰められたときに、ついにビルから飛び降りてしまったということだった。幸い命は助かったものの、それ以来、人が大嫌いになったという。それが原因なのかどうかはわからないが、事業所では、利用者や職員に暴言を吐いたり、ひどいときには暴力を振るったりするので、誰もひとしさんに近づこうとする人はいなかった。

ひとしさんの援助に困った事業所ではソーシャルスキルトレーニングを取り入れたり、アンガーマネジメントの研修に参加してもらったり、何とかひとしさんの行動上の問題を解消したいと支援していた。私がひとしさんの心理的援助を頼まれたのもその頃である。私は、ひとし

さんとの面談のなかでその背景を聴こうとするのだが、ひとしさんはころを閉ざしているのか「あんたは、具体的に僕が楽になる方法を探すだけでいいんや」と言うだけだった。質問を変えたり、場所を変えたりと工夫してはみたのだが、その「具体性」がちつとも語られないことに困っていた。ひとしさんは「怒り」という感情を通して私たちに何を伝えたいと思っていたのか。私はそれを知りたかった。

「おとぎ話解釈法」を用いて

「おとぎ話解釈法」について少し説明をしておきたい。私は、障がいがある人や、障がいはないのだけれど「生きにくさ」を抱えている人との面談のなかで、その人が言いたいこと、伝えたいことを受け取れているのかどうか悩んでいた時期がある。そんなときに思いついたのが、おとぎ話の主人公の思いやセリフを考えてもらうという方法である。私はこの方法に自分で「おとぎ話解釈法」とたいそうな名前をつけているのだが、5、6年前から、コミュニケーションに課題があったり、自分の内面を言葉にして語るのが難しかったりする人や子どもにこの「おとぎ話解釈法」を試してもらっている。よく題材として使うのは、多くの人が知っていると思われる「桃太郎」や「浦島太郎」などであるが、その話を知らない人にはその場で読み上げたり、その人がよく唄っていたと語る童謡を取り上げたりすることもある。

おとぎ話を題材に使う場合は、そこに出てくる登場人物のセリフを考えてもらおう。たとえば、小さい頃に「桃太郎」をよく読んでもらったという人には「桃太郎」を題材に使い、

①川上から桃が流れてきて、それを割ったら男の子が出てきました。おばあさんはなぜこの男の子を育てようと思ったのか。おばあさんになりきってセリフを言ってください。

②桃太郎が「鬼退治に行きたい」と告げたときに、おじいさんやおばあさんはどう思ったでしょう。そのときの気持ちをおじいさんやおばあさんになりきって考えてください。

③鬼退治に行く途中で出会った、犬、サル、キジはなぜ桃太郎の家来になろうと思ったのかについて考えてください。

④突然、桃太郎が自分たちを退治しに来たとき、鬼たちはどう思ったでしょう。

などの項目を基本にし、なるべく口を挟まないように淡々と記述していくという方法をとっている。気になったセリフには後からなぜそう思ったのかを聞いたりもする。

はじめは、この方法を使うことで何がみえてくるのかについてはっきりした考えはなかったのだが、実際に、障がいがある人18名、そして障がいがない人（職員や私の学生たちに協力してもらい）30名ほどの結果をまとめてみると（後でくわしく触れたいと思うが）、障がいがあったり生きにくさを抱えている人と、そうではない人の立場や解釈に偏りや差異があることがわかつ

た。そこで、ひとしさんにも「おとぎ話を題材にして少しお話を伺ってもいいですか？」と聞くと、「おもしろそうやし、かまわんよ」と言ってくれたので、ひとしさんが小さい頃に読んだという「桃太郎」を取り上げた。

ひとしさんの解釈

私…川に流れてきた桃から赤ちゃんが生まれてきて、おばあさんとおじいさんは、どんな思いになったのでしょうか？ おじいさんとおばあさんになったつもりで答えてください。ひとしさん…「自分たちが育てないと死んでしまう。びつくりしたけど、どうにかしてあげないと死んでしまう。自分らが見捨てたら死んでしまう。命なんやから。親がおらんから、とりあえず自分らで面倒みてやろう。にぎやかになって楽しいやないか。歳がいつて大変やけど、頑張つて育てよう」と思ったんじゃないかな。

私…では、桃太郎が鬼退治に行きたいって言ったときにはどう思ったでしょう。

ひとしさん…そりゃあ、鬼退治に行きたいと言ったとき内心は心配。でも、その子の意思なら、行かんでもいいのには思わん。自分で決めたなら頑張つてこいと送り出してやりたい。

私…なるほど。では、途中から、犬とサルとキジがきびだんごをもらつてお供になりました

が、そんな危険な旅にどうして行こうと思ったのでしょうか？ 彼らの気持ちになって答えてください。

ひとしさん…犬、サル、キジは、きびだんごをもらったから、仲間になろうと思ったんやろけど、きびだんごだけではないわな。ひとりには寂しいから、仲間になろうと思った。

私…あ、きびだんごだけではなかったんですね。仲間になりたかったんですね。では、鬼ヶ島の鬼は、突然、桃太郎が成敗に来て、どう思ったのでしょうか。

ひとしさん…「へんな奴がきたな。闘うのは面倒くさいな。自分らは悪いことをしているとわかっていないのに。なんで退治に来た？」て思ったやろ。「自分らは生まれたときから鬼やから。鬼が仕事やから、何が悪いんか、退治されるのか、僕らがやったらかんのか。なんでいつも責められるんや。金銀、ほしいわけじゃない。そうせんと自分らも食べていけん。やけど、攻められたら闘うしかない。ピストル向けられたら闘うしかない。自分を守らなアカン。どうしていいのかわからんから闘うしかない。闘いたくなくとも闘うしかない」。

ひとしさんは、一つひとつの質問をじっくり考え、時間をかけて丁寧に答えてくれた。ひとしさんのセリフからは人を避け、あるいは人に攻撃性を向ける姿はみえなかった。先に、障がいがある人とそうではない人の答えに差異があると述べたが、後者はいわゆる一般的な患者を

退治する「勇者の物語」として答えてくれることがほとんどであった。これは、「そもそも、こういう文脈で読んでほしい」といった物語解釈についての期待があらかじめわかっており、その文脈に応じて読んでいるのだろう。そのため、桃太郎は勇気がある少年であり、鬼は退治されるべき「悪者」なのである。そのため、鬼のセリフも「生意気な小僧め。返り討ちにしてやる」「俺らの力をみくびるな。俺らの力を思い知らせてやる」などと文脈に沿ったセリフを考えてくれる。

しかし、障がいがあったり、障がいがなくても「生きにくさ」を抱えている人は、ひとしきりと同様に、「鬼には鬼の都合がある」「鬼が人のモノを盗らなくていいように、生きるための方法を教えてくれ」「成敗されても仕方がないかもしれないけど、ただ鬼やからということで作られるのは嫌だ」などと、物語の文脈には沿わない、鬼の立場に立ち、鬼の心情にこころを寄せる答えがほとんどだった。これは正直、驚きだった。

通常、人が物語を読むときには、まずは一般的な文脈に沿って理解しようとすると思うが、障がいがある人や生きにくさを抱えている人たちは文脈を読むというよりも、もっと自由にセリフを立ち上げる。そして、自由に立ち上げられたセリフに彼らの考えが反映されているならば、ばらつきが出てくるはずなのに、そうではない。その共通性はどうして生まれるのだろうか。

本当はつながりたい

彼らは自分を世のなかから迫害され疎外された、「桃太郎」のなかで語られる鬼のような存在だと捉えているのであろうか。ひとしさんと同じように、「自分たちが悪いんや。存在したらかんのや。でも、自分を守るためには闘うしかないんや」と答えた精神障がいがある女性がいる。彼女になぜそう考えたのかの理由を尋ねたとき、「自分が、やつつけられる経験をしたくさんしてきたからじゃないか」と言った。彼女は親からひどい虐待を受け、結婚した夫からもDVを受け、精神の調子を崩し何度も自殺未遂をしたという過去をもつ。その彼女に、「じゃあ、どうしたら闘わなくて済むんだらうね」と何気なく聞くと、「ただお互いがどう思っているかをよく話し合ったらいいんじゃないか」と言った。そして「そしたらわかり合える」と続けた。この彼女の言葉を胸に、ひとしさんに「答えていただいたセリフをちよつと深く読んでいきましようか」と提案し「いいけど」という消極的な了解を得た。どうなるかはわからないけれど「話し合ったらわかり合える」と教えてくれた彼女の言葉が背中を押してくれた。

ひとしさんの考えてくれたセリフのなかにいくつか気になったものがあつたので、それらについて面談のなかで深く聴かせてもらうことにした。たとえば、桃太郎が桃から生まれてきたときの「自分らが見捨てたら死んでしまう。命なんやから」という言葉。桃太郎が鬼退治に行

きたいと言ったとき「その子の意思なら、行かんでもいいのには思わん。自分で決めたなら頑張ってこいと送り出してやりたい」というおじいさんとおばあさんの思い。犬、サル、キジがなぜお供になったのかについて「きびだんごだけではないわな。ひとりには寂しいから、仲間になろうと思った」という言葉。鬼に対する「金銀、ほしいわけじゃない。そうせんと自分らも食べていけん。やけど、攻められたら闘うしかない」「自分を守らなあかん」といった解釈についてである。

ひとしさんは直接自分のなかに生じている思いを伝えるのは恥ずかしかったり難しかったりしたのかもしれないが、おとぎ話の解釈を通して、自身の内面に少しずつ気づくようになっていった。私もひとしさんは、実は命の大切さを人一倍感じていること、物質的なものがほしいのではなく、むしろ本当は寂しくて他者とのつながりを求めていること、攻撃されている思い込んでいるために、過剰な防衛が今のひとしさんの暴言や暴力として現れているのではないかということに気づいていった。

外側からみれば、ひとしさんは人とのつながりを避け、攻撃的で扱いにくいと思われていたかもしれない。しかし、ひとしさん自身の内面に生じているそれまで気づかなかった感情や願いが言語化され、意識化されたとき、具体的にそれらに向かい合う方法がみえてきた。ひとしさんとは長い期間をかけて、「本当はどう思っていたのか」「本当はどうしたいのか」を語り合った。ひとしさんの許しを得て面談の内容をつないだ職員も「そうだったのか」とひとしさん

の思いや願いに気づき、対応を変化させていった。そうこうしているうちに、ひとしさんは自分を守るための強固な鎧を脱ぎ始め、少しずつ事業所での仲間ができていったのだ。

おわりに

文中で紹介した精神障がいがある女性が言ってくれた「話し合うことでわかり合える」というシンプルな方法が、ひとしさんや援助する私たちにも気づかなかった、こころの奥底に沈み込んだ光を輝かせることになった。おとぎ話の解釈を媒介にして語り合うことも、それを輝かすための一翼を担ってくれたのかもしれない。

語りのなかにはその人が生きている現実が現れてくる。その現実が、私たちがみているものと違ったとしたら、それが、それまで気づかなかったものがみえてくるときであり、双方の視点や関係性を大きく変えていくときとなるのだ。

彼らは何かしらの援助の対象になったときから、匿名化され、大きな枠組みのなかで理解されることがある。しかし、名前をもったひとりの人として語る彼らの「語り」は、外側から眺めているだけではとうてい理解できなかった、感じられなかった、鮮やかで豊かな世界がそこに広がっていることに気づかせてくれるのである。

〔倫理的配慮〕

ひとしさんや事業所の職員にはこれまでの面談の記録をここで掲載するにあたって、その趣旨を説明し、個人が特定されないように配慮することを伝え、「かまわんよ」と了解していただいた。記して感謝する。

〔文献〕

(1) 山本智子『発達障害がある人のナラティヴを聴く―「あなた」の物語から学ぶ私たちのあり方』162頁、ミネルヴァ書房、2016年